劇団 風の子中部

新ギャング・エイジ

GANG AGE

スタッフ
原作／阿部 夏丸
脚色／いずみ 凜
演出／中島 研
音楽／曲尾 友克
身体表現／若林 こうじ
制作／西川 典之

「ぼくはギャングになる！」

元気で明るくクラスの人気者だったエイジは偶然に
偶然が重なった事件から、突然「らんぼう者」呼ばわりされてしまう。
「自分は変わってないのに、どうしてまわりの見る目は変わるのか？」他者との関わり、他人の評価、徐々にはめられていく枠…そんな周囲に戸惑いながらも、自分を貫き通そうとするエイジと仲間達。その先に見えてきた青空、その向こうにあるもの―。

制作にあたって

子どもはしたたかだ。どんな時代であっても、どんな状況が襲ってきても、それを子どもたちの力で上手に乗り越えてきた時代があった。もしかしたら、今の子どもたちだって、自分の力で克服していく力を持っているのだろう。実は今の大人社会のほうが、子どもたちを許容することができるかどうかが問われているのではないだろうか。幼稚園で乱暴者とレッテルをはられた幼児が、ガムテープでぐるぐる巻きにされた事件が発覚した。手に負えないものは、排除するしかないという発想は、何を生み出すのだろう。大人の子どもへのまなざしが子どもに寄り添うものであった時、初めて子どもたちが生きる輝きを取り戻していける。

小学校3、4年生のことを総称し、ギャングエイジと呼ぶ。今もそれは変わらないはずである。しかし、自己規制し、自分を表現する子どもが減ってきているように思えてならない。トラブルを回避することが最重要課題となってしまったのが、現代といえるのではないだろうか。

遊んだり、ケンカしたりを繰り返し、その中で遭遇したさまざまなトラブルに対し、排除の論理ではなく、自分の思いをぶつけ合い、這い上がっていく子どもたちの姿を表現してみたい。そんな思いが風の子中部の中からふつふつと湧き上がってきた。

作家の阿部夏丸氏は語ってくれた。「子どもたちは、どうのこうのと評論する大人が一番信用できない。本質は昔も今も何にも変わっていないんですよ。変わったのは、大人社会のありようなんです。だから、僕らはとことん子どもたちを信頼していきましょうよ。」

「ギャング・エイジ」エイジ君を中心に、その仲間たちが、彼らを取り巻く現実にどう向かい合い、立ち向かっていくことができるのか。それは、私たちのこの時代への挑戦かもしれないと思いながら。